

われわれの教育活動

2007 年度総括と 2008 年度方針

29

2008 年 4 月

一橋大学スポーツ科学研究室

われわれの教育活動

2007年度総括と2008年度方針

29

目次

はじめに	3
・われわれの教育活動をめぐる状況	5
1．大学をめぐる政策動向	5
2．本学の動向と運動文化科	5
・2007年度の教育活動の成果と課題	6
1．カリキュラム編成と体制	6
2．2007年度の教育活動の成果と課題	7
(1) スポーツ方法	7
(2) スポーツ方法	12
(3) スポーツ科学・健康科学	18
(4) 教養ゼミ	20
(5) 学部講義・ゼミ	20
(6) 大学院講義・ゼミ	24
3．教育条件の整備・拡充	26
・教育部活動	28
1．実践交流会	28
2．教育活動日誌	29
3．調査活動	29
4．教育部の活動・体制	31
・2008年度教育活動の方針	31
1．2007年度の達成と課題	31
2．2008年度の基本方針	32

3 . 教育活動	32
(1) 2 0 0 8 年度のカリキュラム編成と体制	32
(2) カリキュラム、および教育内容・方法の充実	33
4 . 教育条件の整備・拡充	34
5 . 運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整	34
6 . カリキュラム開発・教育方法改善のための調査、研究	34
7 . 教育部の活動	34
(1) 諸行事の開催	34
(2) 調査活動	35
(3) 資料・調査報告書・研究成果等の発行	35
(4) 2 0 0 8 年度教育部関係日程（案）	35

年間計画

資料 1 . 2 0 0 7 年度時間割

- 2 . 「スポーツ方法」「スポーツ方法」に関するアンケート調査用紙
- 3 . 「スポーツ方法」「スポーツ方法」に関するアンケート調査結果
- 4 . 平成 1 9 年度「教育研究環境整備費」要求書（フットサルコート of 整備ならびにフェンスの設置（ゴルフ練習場周辺を含む））
- 5 . 実践報告：ゴルフの授業（藤田和也）
- 6 . 実践報告：スポーツ方法の半期 2 単位化を目指して～「スポーツフィットネス」の実践例を中心に～（岡本純也）

はじめに

2007年度の運動文化科の基本的な課題は、以下の4点に集約することができる。

第一は、現行の運動文化カリキュラムの円滑な運営と、それをベースにした共通教育の全学的な改革論議への運動文化科としての有機的なコミットメント。

第二は、キャンパス統合・移転改築期に積み残された体育施設拡充計画の実現、ならびに、当面の施設改善。

第三に、複数年次にまたがる定年退職者の出現と、それにとまなう後任人事の円滑な推進。

第四に、人件費削減計画(定年退職後のポストの一年間不補充と非常勤経費・コマ数の削減)の年次進行にとまなう専任スタッフ・非常勤の減少への対応。

上記4点のほとんどは、法人化以降の国立大学および本学の運営方針や中期計画と関連している。しかも、事態は必ずしも明るい方向にむかっているとは言い難い。この間、教員の既存学部へのインテグレーションや大学院大学化にとまない、運動文化のスタッフ全員が専門教育と有機的にかかわるようになった。全国的にも、スポーツの社会科学的な研究・教育の有力な拠点校の1つとして注目され、その地歩を築きつつある。しかし、共通教育・旧教養教育の人的・財政的な基盤については磐石とはいえず、制度的にも、さらなる工夫が求められている。とりわけ、運動文化の教育にかかわる施設整備については、体育館の問題に象徴されるように、キャンパス統合後、進捗していない。

小平分校で授業をしていた頃は、まがりなりにも、教養教育を実質的に担う教育組織の権限と責任がはっきりしていた。現行の運動文化科目の旧科目名は「保健体育」であったが、授業は実技と講義に別れており、実技は1年次が通年制で、語学のクラスを単位にして行い、2年次は半年間の種目選択制であった。2年次には、実技に加えて、半年2単位の保健体育講義があり、実技・講義ともに必修だった。学生にとっては、1年次の実技が種目指定で選択の余地がないなど、窮屈なカリキュラムであったかもしれない。だが、全ての学生に1年半の実技と半年間の講義を必修として履修する体制を整えていたという点で、それなりに充実したシステムであったといえる。

小平時代の保健体育カリキュラムには、なお、いくつか、特筆すべき工夫がほどこされていた。女子学生の履修上の便宜を勘案して開設した、女子学生のみ受講可能な実技の授業(「一年女子体育実技」)、50メートルの泳力を1年次必修保健体育実技の単位取得の要件とする制度と、50メートル未完泳者を対象にした水泳講習会。病気加療中の学生を対象にした「療育コース」の授業。実技と講義を合体させた2年次生むけの保健体育講義・実技(合)の開講、などである。

そのうち、とくに印象深いのは、夏休み直前に実施された水泳の検定制度と講習会である。水泳の50メートル必修制は、学生にとっての義務というより、むしろ、泳げるようにすることが教員の義務であるという発想のもと、確固とした泳法指導を背景にして導入された。確固とした泳法とは、「ドル平」泳法のこと、水泳技術の核心が呼吸、すなわち息継ぎにあるとみ

なし、呼吸法をベースにしてリラックスした泳ぎを組み立て、安定的に姿勢を制御しながら、ドルフィンキックをもって浮力と推進力をつけていく泳ぎ方のことである。この泳法の講習によって参加者全員が50メートル泳げるようになった。学生と教師がともに「よるこび」を分かち合い、人間的なつながりを深めることができたように思う。さらに、特筆すべきは、この講習会が集団的の行事として企画され、教員と助手の全員が指導と運営に携わったことである。水泳講習会は、指導法に関する相互学習・集団研究を活発化させ、助手を含め、スタッフ全員による集団的な教育力を蓄積するうえで、重要な契機となった。では、なぜ、水泳の講習会が学生と教師を結びつけ、スタッフの集団的な力を引き出すことができたのか。

マルセル・モースやレヴィ・ストロースは、「泳ぎ」や「歩きぶり」「走り方」などの身体の利用法を、「身体技法」と名づけ、伝承なくして技法の伝達はありえないとし、社会的なものや生物学的なもの、個人と集団との間隙を埋める装置として意義づけようとした。かれらはいふ。そこには、生身の人間、「全体としての人間」の出会いがあり、知的なだけでなく、身体的な連帯感を育み、全人類を結びつけ、人種的・社会的な偏見を乗り越えることができるのだ、と。かれらは、「身体技法」が生物学的なものや社会学的なものだけでなく、心理学的なものによって媒介されており、人間の行為における生物学的なものや社会学的なもの、さらに心理学的なもの、それら三者を統合しうる「三重の視点」、すなわち「全体的人間」という視点を備えているとみなした。人間や社会を機能的に分化した存在としてではなく、身体的・生理学的・心理学的・社会学的諸側面をあわせもつ「全体的存在」として考察しようとしたのである。スポーツ・運動文化は、トータルな社会・人間把握の基点をなす。本学のカリキュラムにおいても、また、そうあるべきであろう。

2008年3月 高津 勝

．われわれの教育活動をめぐる状況

1．大学をめぐる政策動向

2007年に展開された大学政策動向をまとめると、

運営費交付金の競争的配分案と「適正」配分方針（「骨太方針2007」）

人件費5%カットによる教育研究条件の悪化

矢継ぎ早の大学院教育「充実」策

「学士課程教育再構築」（中教審大学分科会制度・教育部会審議経過報告）

政策主体：経済財政諮問会議、財政審、中教審、教育再生会議、・・・

など、2004年法人化以降の政策は、徹底、変更、迷走、矛盾が入り混じっている。

2．大学の動向と運動文化科

2008年度、法人化4年を経て5年目に、中期目標・計画の6年の1年前ということで、積み残しの計画の「達成」に向けた施策、「改革」が進められる局面に。

この1年の大学の動向をまとめると、

トップダウンの大学運営の矛盾の顕在化

関係スタッフ抜きのアカハラ対策提案の押し付け、事務職副学長の新設での教授会審議と評議会の形骸化、情報処理システムの混迷、・・・

人件費カットによる非常勤講師手当削減

競争的資金と非常勤職員の増加

職員評価の施行と教員評価の第一次試行

学長選考の一定の前進的改革

商学部・研究科の大規模なカリキュラム改革

英語教育強化策と共通教育改革の提案と全学合意の難航

運動部OBの寄付によるスポーツ施設の改善の進展、一方で体育館概算要求の文科省止まりによる未実現、文科省による耐震化施設改善の予算実現

運動文化科との関連では上記が重要である。この点でのわれわれの対応は、教授会での意見とともに大学教育研究センターの全学共通教育開発プロジェクトでの運動文化の位置の明確化、全学WGとの関係づけ、その中間報告の検討というものであった。提案へのわれわれの独自の見解の表明はしなかった。

上記との関連では教育担当副学長と（関係部署と）運動文化科との情報連絡会の設置が特記すべきものであった。

この2月に本学学生生活実態調査集計結果報告が出た。この中からいくつかピックアップして学生の現状を把握したい。（回収率20%）

出身高校 公立と中高一貫型の私立が多い。家庭の所在地 地区は東京、関東が6割、中部、

九州・沖縄が2割。都市規模は大都市、中都市が多い。アルバイト 販売・セールス・サービス業が4割、家庭教師と塾講師が5割5分、屋内体育施設 利用したことがない26%、屋外体育施設 利用したことがない23.5%、施設・設備の充実・整備が早急に必要と思うもの 屋内体育施設 16.4%、屋外体育施設 6.9%、部活・サークルへの所属 体育会系 32%、スポーツ系学内サークル 7.6%、同インカレサークル 12%、合わせると50%強、授業の合間、昼休みの過ごし方 屋内・屋外体育施設 1%、学内食堂 53%、図書館 34%、教室・ゼミ室 30%。

なお、大学体育の動向についてはほとんど情報を得ておらず、ここに記すことができない。

(上野卓郎)

2007年度の教育活動の成果と課題

1. カリキュラム編成と体制

<体制>

- ・専任は、早川後任の採用が延期になったため、7人の体制となった。
- ・藤田のサバティカル取得分(不完全ながら)及び定年前の負担減は、非常勤講師を充てた。
- ・専任担当総コマ数は22.5コマ。
- ・非常勤コマの削減10%であったが、専任不補充及びサバティカル等を非常勤コマで充当したため、非常勤担当コマ総数は19.5で、昨年度より0.5減となった。(2006年度20コマ)。運動文化科目開講コマ数(教養ゼミ含む)に占める非常勤担当コマの割合は、約46.4%。(2006年度44.9%)
- ・非常勤削減のためやむなく高橋氏に辞めていただくことになった。
- ・非常勤講師の水口氏が都合で辞められた。青沼氏に代替をお願いした。

<開講コマ：全学共通教育>

全学共通教育科目における運動文化科目の開講総コマ数は、通年コマに換算して42コマである。

	2007年度		2006年度	
全学共通教育開講コマ	42	通年コマ	44.5	通年コマ
・方法 (療育コース)	28	通年コマ	30	(1)通年コマ
・方法	19	半年コマ	19	半年コマ
・健康・スポーツ科学	6	半年コマ	7	半年コマ
・教養ゼミ	3	半年コマ	3	半年コマ

<スポーツ方法：種目別開講コマ数>

	スポーツ方法 = 通年		スポーツ方法 = 半年	
	2007年度	2006年度	2007年度	2006年度
テニス	10	9	5	5
バスケットボール	2	2	2	2

バドミントン	6	6	3	3
サッカー	3	3	2	2
バレーボール	1	1	0	1
ソフトボール	2	2	1	-
野球	0	0	1	1
ジャズダンス	2	2	-	-
フライングディスク	1	1	2	2
スポーツフィットネス	1	1	-	-
フラッグフットボール	0	1	-	-
剣道	0	1	-	-
療育コース	0	1	-	-
体操	-	-	1	1
ゴルフ	-	-	1	2
卓球	-	-	1	-
	28	30	19	19

2. 2007年度の教育活動の成果と課題

(1) スポーツ方法

全体的な特徴

毎年学年末に行っている学生アンケートの結果を参照しながら、本年度のスポーツ方法の全体的な特徴をみていきたい。

本年度も、昨年に引き続きスポーツ方法の全体的な「満足度」は高い値を示した。「大変満足」(30.8%)、「まあ満足」(48%)をあわせて8割弱が「満足」と答えている。合計では下回ったが、2006年度よりも「大変満足」と答えた学生が多かった(昨年は24.7%)。他方で、昨年は調査開始時(1999年)からもっとも低くなった「不満度」(「やや不満」「大変不満」)は、それぞれ、3.2%、1.2%と再び上昇した。いずれの割合にしても、どのような内容が「満足」および「不満」という結果に結びついているのかの検討は必要であろう。アンケート方式の限界から直接の原因は不明瞭ではあるが、「目標達成の度合い」をみることで、多少の推測は可能であろう。

「目標達成の度合い」についての質問は、2005年度から、『学修計画ガイドブック』に掲げたスポーツ方法の目的、()基礎的な体力の養成、()スポーツを行い、楽しむ上での基礎的能力(技術認識、練習方法、技術習得など)の養成、()グループを通しての人間関係の形成の3つに対応してつくられた。質問では、「体力の維持・向上に役立ったか」、「技術・方法の認識は深まったか」、「技術・技能は向上したか」、「仲間ができたか」、「スポーツを楽しむことができるようになったか」という5つについてたずねている。「体力の維持・向上に役立ったか」では、「大変そう思う」(11.0%)、「そう思う」(49.9%)で、ほぼ昨年と同様である(それぞれ11.2%、50.3%)。このことは授業が週に1回であることを考えると、総

合的な体力の維持・向上は簡単ではないことを物語っている。他方で、個々の種目については、
の技術・方法認識については 8 割が「そう思う（認識が深まった）」と答えている。この点
でも の「技術・技能は向上したか」という質問については、「大変そう思う」「そう思う」の
合計が 64.5%と に比べ低くなっており、練習方法や身体技法についての認識を深めることは
できても、それを実際に身につけることはなかなか難しいことが読み取れるだろう。他方、
「仲間ができたか」では、昨年よりも若干伸びがみられる（「大変そう思う」30.3%、「そう思
う」51.5%）。さらに、「スポーツを楽しむことができるようになったか」も、「大変そう思
う」「そう思う」と答えたのは全体では昨年とほぼ同様の 8 割以上であるが、「大変そう思
う」に若干の伸びがみられる。後述する教員のアンケートからも技術の習得・向上を通じた「スポ
ーツの楽しさ」が指摘されており、それにより仲間との交流も活性化していることがうかがえ
る。限られた時間数のなかで、認識を深めそれを技術の向上につなげていくかは大きな課題と
なっており、その点に仲間作りの方法も関わっているといえよう。

「スポーツ方法 の受講理由」では昨年度に比べ大きな変化はみられないが、「スポーツ方法
の履修希望」に関わっていくつかの変化が読み取れる。第一に、「是非履修したい」という積
極的な回答が 5.9%と、昨年の 9.6%と比べ減少した。それに呼応するように、「履修しない」
と答えているものは 38.7%とこれも昨年の 31%よりも増加している。その理由としては（複
数回答）「単位数が少ない」（55.3%）、「スポーツが好きではない」（11.8%）、「やりたい種目
がない」（4.2%）などは例年とほぼ変化はないが、「他の科目を優先する」が 46.8%と若干伸
びている（昨年 44.3%）。また「特に理由はない」という消極的な回答も 3.4%から 6.6%へと
伸びを示した。さらに「スポーツの必要性を感じない」も 1999 年度以来、初めて 10.3%と二
桁になった。「満足度」は例年通り高い数値を示しているが、「必修科目」を取り終えた後、「選
択科目」（スポーツ方法 ）までは積極的に履修しようとはしていない。だが、このことは一概
に学生の「スポーツ離れ」とはいえないだろう。進行する全学的なカリキュラム改革により、
履修の縛りは年々きつくなっている。非常勤削減により種目展開も限定されているなかで、学
生のスポーツ方法に対する要求を読み取り、より魅力的な授業内容についてのさらなる検討が
必要であろう。

授業の内容と方法

以下では、各担当教員へのアンケートからみられる今年度の授業の特徴と取り組みについて
みていく。

《異質集団》

現在、新カリキュラムについての議論が進められているなか、スポーツ方法についてもそれ
に対応した授業展開が必要となってくるだろう。

2007 年度は、そのような方向も視野におさめつつ、新たな試みを模索する担当者の様子が見
られた。スポーツ方法 では、種目は異なっても多くの授業でグループを形成し、そこで経験
やレベルの異なる異質集団による学習を行っている。経験者が集まりやすいスポーツ方法 以
上に、経験者、未経験者がどのように授業にコミットするかが、重要な課題となっている。

高津（サッカー）は、「経験者と非経験者との個人技やコンビネーションプレイの構成力に大

きな差がある。この溝の克服が、授業を成功させるための第1の鍵。その次の鍵は、経験者の上層部分を本気にさせること(やる気を起こさせること)」としている。「したがって、最初に伝えた授業のモットーは「未経験者や経験者に関係なく、ともに上手くなり、いいチームを作り、楽しいサッカーをめざすこと」である」とする。グループ運営に気を配り、「昨年までは、グループノートの作成はうやむやに終わっていたが、今年は時間内に記入させるように指導したこと」が功を奏したと述べている。それに対し学生の反応は、「やはりサッカー経験者と初心者間で溝があったように思われた。・・・冬学期も終わりに近づくにつれて、練習も徐々に真剣味が増し、チーム内で話し合うことも増えていき、本当に一つのチームとなっていくように思われた。今まで小・中・高と体育の授業を受けてきたけど、こんなにチームでまとまって1つの競技が出来たのは初めてだったので、楽しかった」。目標とされた、経験者をいかに授業にコミットさせるか、未経験者とともにグループ運営をどう進めていくかという点が、「チーム内で話し合う」ことによって、共に一つの競技を行う楽しみに繋がっている。

同様に、高津のテニスにおいては、「メンバーがテニスの実力をつけ、試合で他のチームにけっこう勝てた要因は、こうしたチーム内のコミュニケーションだったと思う」という学生のコメントを紹介し、技術の向上・技能の習熟、勝利への努力と仲間作りは連動しているという実感を持ったことが述べられている。

尾崎(テニス)は、「実技指導の場面で、教員がどこまで関わるのか(出張するのか)」という点について、今年度は、「昨年度よりも多めに関わるようにした」点をあげている。これは、昨年度のアンケートに課題としてだされたものだが、「具体的には、経験者との連携で練習の仕方等を示して実践することや技術的なアドバイスを個人に対して行う(あるいは、一緒に打ち合う)機会、時間を増やした」。学生の評価は、昨年と比較すると「よかった」という回答が得られている。また、経験者に対しては、グループ内での「技術アドバイザー」という位置づけをオリエンテーションから指導しており、「教えていくことで、自分がやってきた技術でこれまで曖昧だった部分がはっきりした」「サークルで初心者や新入生に教える上での参考になった」といった肯定的な意見がだされている。テニスでは、藤田が11月中旬に一度だけグループを解体して、ストローク練習・ボレー練習・サービス練習用のコートにそれぞれ経験者を配置して初心者の練習相手をする「テニスクリニック」をおこなった。その直接的な成果かどうかは不明だが、「例年よりも班としてのまとまりが日を重ねるにつれてよくなり、他の班と交流試合を折り込んだ秋以降は、練習やゲームへの集中度が比較的高まった印象を持った」としている。

新村(バレーボール)では、「全員がスパイクを打てるようになる」という目標を掲げている。その過程で、「スパイク練習からコンビネーションを踏まえる中で、トス、レシーブへと展開していく学習方法に興味を持った学生が多くいた点」に着目している。「事実、どうしても追いつけなかった一名を除いて、全員がスパイクを打てるようになることで、オープン攻撃だけでなく、前・後のクィック、時間差攻撃に近づいて、更にブロックまで生まれて実にバレーボールらしいプレーであった。この裏側には、指導内容を理論的に理解する姿勢が生まれていったこともあったと考える」また、バドミントンでは、技術指導やルール指導が比較的スムーズに浸透していった大きな要因を、リーダーを中心とした経験者層の活躍が大きかったと指摘している。また、遅刻が少なく、スタートから全体で取り組む雰囲気が生まれていたこともあげられている。「講義の終盤は、授業の進行計画を、リーダーを中心に組み立てており、最後の二週は

アトランダムにチームを構成してゲームを楽しんでいた。授業テーマの一つである、自主的にスポーツの場を作り出していく力を育てるという点に、最も近づいたものとする」として経験者のリーダーシップの重要性を指摘している。

他方で、坂（バドミントン）では、「リーダーが不在でグループワークに非常に苦労した。経験者がなかなかグループに貢献してくれなかった」ということがあった。学生のパーソナリティによる部分も大きいかもしれないが、それに対しては、例年より早めにグループ対抗のゲームをとりいれたことで、グループ練習が活性化しだした。技術的な不安はあったが、練習と試合とのフィードバックが可能となり、結果的にはプラスであったともいえる。

療育コースの廃止 本年度の特徴としては、最後に、療育コースの廃止があげられる。非常勤講師削減の政策をうけて、本年度から療育コースを廃止した。健康上の困難があり、運動に支障がある学生に対しては、各種目に対応することとなり3名の学生からの申し出があった。各担当教員からは、個人の状態を考慮し、グループの中で役割を与えたり（審判、スコア付けなど）、自身の怪我の分析やトレーニング分析、レポートの提出などを課したことで、特別な問題は生じなかった点が報告された。だが、通常授業での受け入れは、個々の受講生の状態に委ねられるため、毎年度ごとに検討する必要があるだろう。

《新しい試み》

本年度もそれぞれの授業で新たな試みが行われた。岡本（フライングディスク）では、スポーツ方法の学生が自主的に参加しており、経験者の少ないフライングディスクにおいては、有効であったとする。種目によっては、経験者の数が圧倒的に少ない場合があり、新たな試みとして注目される。TAの活用とも関連するかもしれないが、同学年という横のつながりだけでなく、スポーツ方法における縦のつながりの活用という点では、ユニークな例だと思われる。同じクラス内でも、白河（ジャズダンス）では、「男子学生4人のうち、ダンスが上級である2年生が他の3人を指導し（2年1名、1年2名）、先輩後輩のきずなをもつようにしました。その結果、2人が出席において積極的になり、実技の技術向上も見られるようになりました」と述べている。さらに、バドミントン（白河）では、「授業初めに（約30分）男子学生と女子学生をペアに行ったシャトルを打つ練習では雑談もなくなり、また学生たちの集中力も高まり、とって実技向上したと思います」等、学生が飽きないような工夫を行っている。

また、ポルスター（サッカー、バスケットボール）は、インターネットで自身のホームページを活用し、ルールなどの知識テストを行っている。またその際に英語でテストを受けられることも特徴的であるといえる。通常の授業も英語によるコミュニケーションが中心となっており、英語スキルの向上がさげばれており、アピールできる点であると思われる。来年度は雨天時にホームページなどを用いての講義が計画されている。

内海（ソフトボール）は、「ピッチングとバッティングのそれぞれの途中で吉村正作成のビデオ（5巻）とティーバッティング用のティーを8本（各チーム2本ずつ）購入し、活用した。ウィンドミルの映像は夏休み後に見せたために少し遅すぎた。学生からも『もう少し早く見たかった』という声もあり、来期は年度当初に見せて、指導に入りたい」と述べている。屋外スポーツにおける雨天時の対策以外でも、AV教材を積極的に用いている例である。同様に、高津（サッカー）でも、雨天時ではあるが、欧州サッカーのドキュメンタリービデオを見せ、現

代サッカーの社会的動向について問題意識を喚起している。

上野（バドミントン）では、本年度初めて1月からシングルスを3週行っているが、火曜3限のクラスでは成功したが、木曜2限では出席の悪いメンバーの消極性により盛り上がらなかったとしている。欠席や遅刻の多発によるクラスの雰囲気低下は常に問題であるが、他方、後述するようにモチベーションの劣る学生への対策もまた課題となってきた。

《最近の学生の特徴》

本年度の教員アンケートでは、「最近の学生の特徴」についても感想をきいた。

青沼（サッカー、テニス）は、種目による学生の違いについて言及している。例えば、サッカーでは「班長のリーダーシップ、個々のメンバーのチーム作りへの意欲は素晴らしい。レポートもきちんと書いてくる」と評価しているが、テニスでは学生のモチベーションが低いとする。これは、時間割の関係で第一希望に入れなかった学生が多かったためであろう（「チーム第三希望」というグループ名も挙げられている）。現在、議論されている新カリキュラムにおいては、各学部の必修に加え、共通教育における履修の縛りもいっそう厳しくなることが予想される。時間割上仕方なく履修するというモチベーションが低い学生に対して、どのように授業を盛り上げていくかという点も今後検討する必要がでてくるかもしれない。

その点で、岡本（スポーツフィットネス）は、「激しい運動は苦手」と答える学生が多いなかで、どのように自分の身体の変化に向き合っていくのかという点を授業の課題にしている。「オリエンテーションの時に『実施したい種目』を聞き、グループで1~2回の授業を担当してもらった。今年度実施した種目は、フライングディスク（岡本担当）、ダブルダッチ（縄跳び）、キンボール、ヨガ、バスケ、サッカー、フットサル、卓球、バドミントン、トレーニングなどである。アラカルト的に『つまみ食い』する授業に、学生は比較的満足しているようである。」「激しい運動は苦手」だが、「体を動かすことは楽しい」と思っている学生や、「必要だと思っている」学生の運動欲求を掘り起こしていくのに、アラカルト的に種目を行うことは有効であったと考えられる。また、来年度への課題では、「毎回の身体データ測定の際に『睡眠時間』も記せるようにしているが、生活全般をチェックする項目を入れることを検討するべきだと思われる。たとえば『朝食を摂ったか』『栄養に偏りのない食事を摂れているか』『ストレスの有無』等。期末、学年末に振り返ったときに、自分の生活がチェックできるような項目を入れるべきだ」と考える。学生の生活実態も考慮に入れ、且つ座学と実技が有機的に連携した新たな授業形態としても注目される。

《成績評価に関して》

成績評価基準については、教員にとっても学生にとっても定着した感がある。評価の仕方がより細分化されている一方、多角的な評価基準も求められている。

高津からは、「出席、期末レポート、グループノート点で評価しているが、これだと4割強が[A]になってしまい、3割近辺に絞り込むのに苦労した。結局、出席点で細分化を図ることになった。出席やグループノートの点数はそれほどよくないが、授業・学習の展開（グループの技術指導や組織化などで）で実質的に貢献してくれた学生の評価をどうするか、という点で難渋した」。新村は「今年度も、最終的にはレポート課題についての内容と実践力の向上を、

グループノートとの整合性を読み取りながら評価したが、大きくは技術に関わる自然科学的視点での理解、社会科学的視点での理解を柱に、五項目のポイントを私の中で押さえ、それらがどれだけ理解し、記されているかで評価点を出した。その結果として、先にも記したように今年度の評価の高い者が増加した。しかし、一方でその結果を分析すると、受講する学生の質的な違いがあつての結果のように感じている。つまり、私の反省であるが、指導の意図的、質的变化ではなく、受講生の質的变化という、いわば自然発生的な結果と考えられ、改めて指導力のなさを感じている」とのコメントが寄せられている。白河は、評価の際、出席、実技テストおよび撮影されたビデオなどを用いている。また、ポルスターは評価の際インターネットの知識テストを含むなど、多角的な視点から総合的な評価を行おうとしている。

他方で、柴崎からは、スポーツ方法の実技の授業には以前のような絶対評価の方がふさわしく、以前の評価方式への移行を求める意見がだされている。また、スポーツ方法 ではないが、スポーツ科学・健康科学を担当する村瀬からも同様の意見がだされた。

《施設に関して》

スポーツ方法 に限定されることではないが、特筆すべきは、作業員の坂口さんによる屋外コート整備である。授業の円滑な遂行が天候に左右されてしまう屋外授業においても、整備が行き届いているために、雨天の翌日でも使用が可能であったとの感想が聞かれた。

他方で、体育館では、床のワックスが専用のものでなく滑りやすいワックスが塗られ、一時期、運動に支障があつた。幸い怪我に至ることはなかったが、学生から「動きにくい」「十分に実力を発揮できない」との声は多数あがっていた。しかも、それが改善されるまでに時間を要したことは問題であつた。床だけではなく、天井の電灯についても、交換に一年近くかかった。交換した後は、シャトルコックが見やすくなったという新村（バドミントン）からの指摘があつた。年度末には、床を削り、新たなラインを引いてもらうなど、かなりの改善が行われたが、バスケットボールのラインが規格外であつたなどして、引き直すという事態が生じた。ライン引きと床整備以外は、ほぼ日常的な修繕の範囲であり、かつ授業に多大な影響を及ぼすものであることから、なぜこのような問題が生じるのか、教務課や施設課、学生支援課がよりスムーズに連携するように求める必要があるだろう。

(2) スポーツ方法

《全体的な特徴》

スポーツ方法 に引き続き、こちらでも学生のアンケートから本年度の特徴を概観する。

授業への「満足度」は、「大変満足」「まあ満足」を合わせると9割を超えており、例年通り高い値となっている。また、「反復履修」の割合をみると2回目以上が55%を超えており、同種目かどうかは不明だが、いわゆる「常連」となり定着していることがうかがえる（「反復履修の希望」についても、「ぜひ履修したい」40.8%、「時間が合えば」20.9%、「やりたい種目があれば」5.8%と高い）。このことは受講生の学年別でも4年生が4割以上を占めていることも関係しているだろう。そのため、もともとインセンティブの高い学生が受講するというのもいえる。他方で、回答者の男女比では、05年度から年々女子の回答率が減少している(23.3 16.7

9.9) ように、女子の「スポーツ方法 離れ」がみられる。これは登録数ではないが、アンケートが多くの場合授業の最終日に行われていることを考慮すると、履修登録をしても半年を通じて出席することが困難であったことも推測できる。全学的な女子学生の割合と比較しても、スポーツ方法 に占める女子の割合は低く、それについても分析が必要であろう。加えて、未受講の学生を引きつける授業開発も引き続き重要課題である。

従来、スポーツ方法 には「常連」や経験者が多く参加し、初心者などは敬遠しがちであると考えられてきた。他方で、「スポーツ方法 の受講理由」(複数回答)からは、「種目が好きである(やってみたかった)」49.0%、「上手になりたい」56.3%よりも、「健康・体力の維持・向上」が62.5%と最も高い値を示していることがわかる。これは一昨年から同じ傾向であり、種目に限定された運動欲求だけではなく、健康・体力への意識の高まりがあることが読み取れる。開講種目が減少を余儀なくされている現在、新しい種目の開発や開講は容易ではないが、学生の多様な要求や意識をどのように授業に反映させていくか検討する必要がある。

「目標の達成度合い」では、スポーツ方法 とは異なり、「技術・技能が向上した」が「大変そう思う」(35.2%)「そう思う」(46.9%)を合わせると8割以上、「技術・練習方法の認識が深まった」(それぞれ42.3%、46.7%)は9割近くとなっており、経験者も多く参加するなかで技術・技能の結果が出ていることがわかる。しかしながら、「仲間ができた」も8割近くが肯定的に捉えており、技能・技術だけではない人的な交流を含んで総体的に「スポーツを楽しむ」ということができていることが読み取れる(「そのスポーツを楽しめるようになった」は「大変そう思う」56.4%、「そう思う」36.9%)。

また、来年以降、GPA制度の本格導入に向けて、未受講の成績記載の方法が変更され、懸案であった、抽選したが一度も授業に出ない、いわゆる「ふりにげ」の学生は減ることが予想される。来年以降の推移を見守る必要があるだろう。

以下では、各担当教員の授業概括、コメントを掲載する。 (坂なつこ)

藤田和也

スポーツ方法 (ゴルフ:月2夏) 登録人数:21名 履修人数:16名

初心者を対象に、スウイングの基本(グリップ、スタンス、セットアップ、スウイング)とミドルアイアンによるショットの習得を目標に授業を進めた。プラスチック・ボール、バードゴルフ、実球などによるショット練習を4~5人のグループに分けてサーキュレートしながら練習し、途中で、ビデオ撮影によるフォームチェック、バードゴルフ・コンペによるラウンドの仕方やルール体験、バレーコートでのアプローチショットの練習、グリーンでのパッティングの経験などを折り込み、最後の3週は民間のゴルフ練習場で授業をし、自分が打った球の方向や落下地点が確認できる練習をした。

授業の最終日にまとめの講義をし、受講者各自の技術的到達点と課題についてアドバイスし、受講しての感想等を求めた。レポートでの感想も含め、かなり好評であった。ことに、バードゴルフ・コンペ、民間のゴルフ練習場での授業がこぞって好評であった。

学期初めの1~2回の出席の後、実質リタイヤした学生が4名と出席不足で単位を認定できなかった学生が5名もいたことが残念であった(1回目のオリエンテーションで念を押したのだが)。

高津勝

スポーツ方法 (サッカー・フットサル：火2冬) 登録人数：28 履修人数：24
(単位修得：22名)

- ・登録者の学部別構成(括弧は単位未拾得者)は、商学8人(1)、経済10人(3)、法学5人(2)、社会5人(0)。
- ・女子2名が履修。スポーツ方法 のサッカーとしては、はじめての経験(フットサル同好会のメンバー)。
- ・履修者が20名に満たないことを考慮して、履修ガイドに「サッカー・フットサル」と表記した。そのことが女子の履修につながったものと思われる。なお、そのことと関連して、履修者の感想に次のような記述があった。「意外であると思ったのは、私はこの授業がフットサルの授業だから体育館で集まると思っていたからである。」
- ・授業展開については、毎回、ウォーミングアップを兼ねた基礎的な練習、フットサル(ミニゲーム) 10人制サッカー、という構成で実施した。
- ・受講者としては、サークルのトップレベルの者から未経験者にちかい者、女子もあり、さまざま。したがって、異質集団によるチーム編成。
- ・以下に特徴的な受講生の感想を記載しておく。
 - (1)「この冬は体育の授業でしかサッカーをする所が無く、体力の衰え等々を実感しました。」「久しぶりにサッカーやったら体力が落ちてしまって全然走れなかったので、…」
 - (2)「スポ が2単位になればみんな授業をとるから人も増えるし、それによって学生の健康増進にもつながると思うのですが…」
 - (3)「自分はサッカー経験がないのですが、授業には毎週楽しく参加させて頂きました。…半年間、ひそかに毎週火曜日が楽しみでした!」「今回の授業を通して学んだことは多かったのですが、何よりサッカーをやっていて楽しかったことが一番です。」
 - (4)「実際に我々がプレーしているサッカーはどうだろうか。まず、第一に戦術の確認が不十分であることが言える。…サッカーにおいて必須の確認事項が抜け落ちてしまっている。さらには、相手の戦術をある程度予測することも重要である。…確認しなければならぬことを怠っていた。」
 - (5)「私は10年くらいサッカーを続けていますが、部活や遊びなどいろいろする中でも体育のサッカーが一番面白いと思っています。部活のように苦行に耐えるわけでもなく、何かがかかっているわけでもなく、勝ち負けは関係ないが負けたくない、そんないい所取りのものが体育のサッカーだと思います。たぶん子供のころにボールを追いかけているときの気持ちがこんなものだったのでしょか。」
 - (6)「女子と一緒にサッカーをするというのは初めての経験でしたが、ちゃんとしたサッカーをやれば、女子も1人のプレーヤーになって、プレッシャーになる存在でした。女子を入れてプレイすることでチームプレイの重要性を認識することができました。」

スポーツ方法 (テニス：水2夏) 登録人数：9名 履修人数：8名(単位修得：7名)

- ・履修者の学部別構成は、商学7人、経済1人、法学1人、社会0人。商を中心とした履修者の構成で、学部のバランスは不均等であった。1年生2名(うち留学生1名)、2年生2名(う

ち女子 1 名、3 年生 2 名、4 年生 3 名。

- ・テニスサークルのトップクラスのプレイヤーから初心者まで経験の差が大きく、統一した練習をするのに苦労した。
- ・毎回、半分練習、半分ゲームで、ダブルスを中心に行った。
- ・学習者によるグループノートは作成せず。

内海和雄

スポーツ方法 (軟式野球：水 2 夏)

登録人数と単位取得 18 名 (2 年生 3、3 年生 5、4 年生 10)

授業内容は講義要綱に従って行った。

当初は 18 名が参加し、対抗試合が出来たが、5 月の連休明けから 4 年生の休みが多くなり、時折 6 : 6 の試合を工夫しながら行った。その他はバッティング、フィールディングなどの集中的な練習を行った。同好会の学生も何人かいたが、そちらでも普段これだけ濃密な練習をすることはなく、喜ばれた。評価結果からも分かるように、登録は圧倒的に 4 年生が多いが、途中棄権も 4 年生が圧倒的に多い。

野球場の内野は整備のために水はけも良くなった。ベンチも設置され、日陰と休憩場が出来て助かった。外野の表面のでこぼこも整備する必要がある。やはり、道具の出し入れが面倒で、野球部部室横に小さな倉庫が必要である。

スポーツ方法 (ソフトボール：水 2 冬)

定員 44 名に対し登録は 33 名になったので、かなり期待を寄せた。しかし 4 年生の大半は出席せず、その点ではやや期待はずれであった。

しかし、芝生の上でのソフトボールは気分的にも随分と優雅であり、学生たちも大いに喜んで、プレーも伸びやかであった。今年は経験者と初心者のバランスも良く、前者による後者の指導も深く、授業としては盛り上がった。特にバッティング時には「ティー」を導入 (購入) し、打法を工夫したことも学習意欲を刺激した。軟式野球同好会メンバーも多くあったが、授業でのじっくりとした練習は、サークルでの練習に補助となると好評であった。

学年間の人間関係も良く、授業の終わるのを残念がった学生が多かった。また、来年の方法のソフトボールの消失を残念がる学生も若干いた。

後期中頃に器具庫が設置され、便利になった。

上野卓郎

スポーツ方法 (バドミントン：火 2 夏) 登録人数：30、履修人数：25

男 16、女 14。4 年 25 人 (うち合格 21 人)、2 年 3、3 年 1。4 年が積極的で活発だった。

スポーツ方法 (バドミントン：木 3 冬) 登録人数：36、履修人数：26

男 23、女 13 4 年 26 人 (合格 18 人)

1 年 1 人、2 年 4 人 (合格 3 人)、3 年 6 人 (合格 4 人)。夏から継続履修 13 人 (合格 11 人)

夏と比べて 4 年の積極性が薄れたが、2、3 年の 7 人の力で何とか活発さは発揮された。2

つのクラスとも4年の履修が多い。これをどう考えるか。総括のさい検討したい。

尾崎正峰

スポーツ方法（器械体操：木3夏） 登録人数：10 履修人数：10

登録者は、基本的に授業に参加（1人だけ途中で脱落したため単位修得はできなかった）。毎年のことであるが、高校までの器械体操経験者は少なく（今回は2人）、体育の授業でマット運動をしてきた程度がほとんどであった。それぞれの技術水準に合わせて技に取り組んだ。講義要綱に記し、また受講生の要望も高い「バク転」には全員がチャレンジした（教員の補助付）。経験者を除けば、補助無しでも何とかできたのは2人。

最終レポートのテーマは「器械体操の授業を受講して感じたこと」。

スポーツ方法（テニス：木3冬） 登録人数：20 履修人数：10

初心者、初級者を主に想定している旨を講義要項、シラバスにも明示しているが、実質的に受講を続けた学生のうちで、テニスサークル所属、あるいは高校までのテニス部経験者の学生がほとんどで、「初心者、初級者」の範疇といえる学生は1人。

毎回、練習内容とその自己分析を記すファイルを各人で作成するようにした（用紙は教員側で用意した）。最終レポートのテーマは「テニスにおけるメンタル面について」。なお、4年生のほとんどは登録のみで、第1回目の授業から出席しない、あるいは「気が向いたとき」に1、2回顔を出すという状況（例年と同じ傾向）。

岡本純也

スポーツ方法（フライングディスク：金2夏・冬）

夏学期23名受講、冬学期39名受講、うち夏冬受講者12名であった。年々、レポート受講者が増え、その中から、昨年度アルティメットのサークルをつくる者も出現した。サークルのメンバーは夏休み中に公式戦に1度出場し、記念すべき1勝を遂げた。アルティメットはマイナーなスポーツであるので、彼らは他大学のサークルとも日常的に練習の場で交流をしている。そのような理由で、戦略や練習方法などを外で学び、授業の場へそれを持ち込むことになった。このことにより、授業の練習、ゲームのレベルが向上した。受講生の顔ぶれが変化してもこのようなレベルを維持できるように、上記の教材作りをする必要がある。この教材が完成すれば、方法の授業でも活用できるとともに、方法においても、初心者の自習に利用できるだろう。うまく活用できれば、授業の中の成果が年々蓄積されていくことも期待できる。

坂なつこ

スポーツ方法（バスケットボール：水1夏） 登録人数32名 履修人数：27名

例年通り4グループをつくった。例年通り、バスケット経験者が多く、また、授業のリピーターも多いので、スムーズに授業が行えた。グループ活動を促進するようにしたが、来年は全体の練習なども取り入れてみようと思う。

スポーツ方法（バドミントン：水1冬） 登録人数：35名 履修人数：19名

こちらは2グループを作り、主としてグループ対抗のゲームを行った。体育会ではなく経験者が何人かいて、未経験者にいろいろ質問される中で指導したりしており、グループ活動も例年になくできたと思う。ただ、出席者が少ない場合など、グループ対抗でできないときもあった。例年のことだが、抽選で落ちている学生もあり、一度も出席しない学生への対策も検討する必要があると思う。

Polster

スポーツ方法 (サッカー・フットサル：火2夏) 登録人数：9 履修人数：5

It was hard to play team soccer with less than 6 participants. However, students could enjoy the technical ball drills in pairs and small groups. 3 female students started the class. Only one of them finished the soccer course.

スポーツ方法 (バスケットボール：火2冬) 登録人数：20 履修人数：13

This year an unusual high number of Basketball beginner or students with less skills participated in this class. Only 3 % of the class participants were credited with A. Nevertheless, everybody has been very engaged during the game. Technical advanced students have been good team leaders. Surprisingly high rate of students took the Internet Knowledge Test for Basketball (96 %).

柴崎涼一

スポーツ方法 (テニス：金1夏) 登録人数：22 履修人数：18

今回も履修者のほとんどがテニスサークルに所属していた学生であったために、数人いた未経験者に肩身の狭い思いをさせていただきました。今後もこのような傾向は続くと予想できますので、できれば最初の募集の段階から経験者限定と明示させていただければと思っています。

スポーツ方法 (テニス：金1冬) 登録人数：34 履修人数：23

1月に4回授業があったためコートの状態が心配でしたが、しっかり整備をしていただいたおかげで無事に実技が出来て感謝しています。また今回は初心者がわずか2人だけでしたので同じレベルでのダブルスの試合をすることができず、彼らにとってはあまり有意義な授業にはならなかったように感じました。今後の課題にします。

鬼丸正明

スポーツ方法 (テニス：木3夏) 登録人数：30 単位取得者 25

初心者・初級者対象のクラスとシラバスにも明記しているが、初心者は2名、初級者は6名(しかしそのうち4名は中上級グループでも十分通用するレベルで、実質的な初級者は2名、そのうち1名はすぐ来なくなった)残りの22名は中上級者。実質的に指導は初心者・初級グループに集中してしまうので、その間中上級者は、各自話し合って自由に練習する、そして学期後半のゲームになったら各グループが交流するというスタイルでここ数年授業を行ってきた(中上級者に任せても彼らは自主的に練習・ゲームを行ってきたので)が、今年は中上級者のグループ作りがうまくいかず、最後まで適切なフォローができなかった。これはここ数年指摘

しているように、初心者クラスに大量の中上級者がきてしまう、しかもそれを登録時点で選別しないし、選別する手立てもとられていないというところに本質的な問題がある。早急の改善を希望したい。しかし来年度もこの傾向が続いた場合は、中上級者のグループのグループ作りに例年以上に意を用いたいと思う。

また成績説明請求制度に基づく請求願が1通提出され、文書で回答した。

(3) スポーツ科学・健康科学

今年度は、以下の6つの講義が開講された(専任3、非常勤3)。受講人数(登録者数)は70名前後から400名弱と幅があった。講義内容の詳細、学生の授業に対する姿勢、授業運営上の特徴、講義全体の成果と課題等については、下記のそれぞれの講義の項を参照。
(尾崎正峰)

スポーツと権利(内海和雄 火3:夏)

受講人数:310名

講義要項の通りに講義した。2301教室がとれたので昨年のように受講生を制限することなく310名が登録した。それにTAがつくことにより、会場係は彼に頼み、講義に集中できた。初めての経験であったので随分と助かった。

教科書を使用したために、配付資料は時事的な内容の新聞記事を配布した。また、パワーポイントを使わず、専ら講義した。中にはそれがかえって新鮮だとの感想文もあり、一方でパワーポイントの普及の実態を知らされた。

評価結果から、1、2年生は必死で単位を取得に来ているが、3、4年生はやや「気楽に」参加している雰囲気伺われる。

現代社会とスポーツ(岡本純也 水2:夏)

受講人数:69名

講義のテーマ「グローバル化とスポーツ」

『越境するスポーツ』(創文企画、2006年)をテキストとし、各章のテーマをそれぞれの執筆者に1コマずつ担当していただいた。できることならば、2時間ほど連続で担当してもらえればそれぞれの内容についてもう少し深めることができたであろう。

最終的にはレポートを提出させて採点したが、スポーツをテーマとする場合、インターネットを利用してコピー&ペーストで作る「剽窃レポート」が続出する。あまり「悪い」という気もなく気楽に作られているようであり、授業において「剽窃が悪であること」やインターネットを利用した場合のレポートの作成方法について、しっかりと指導する時間をとらなければいけないと強く思った。

地域社会とスポーツ(尾崎正峰 木2:夏)

登録人数:99

履修人数:76

(登録のみで出席しない学生の割合は4年生が若干高い傾向にあるが、2、3年生でも2割程度はいる)

テーマ:地域におけるスポーツの諸相

講義で取り上げた小テーマは、「世論調査から見る人々のスポーツ参加の実態と社会背景」子

ども・青年の身体・運動・スポーツの実態と問題」「もうひとつの「しょうがい」スポーツ～障害を持つ人々のスポーツ」「生涯スポーツをめぐる政策・行政の歴史と現状」「日本におけるスポーツクラブの展開過程」であり、それぞれの小テーマごとに 2、3 回の講義時間をあてた。毎回、小レポートを実施した。

受講生に講義テーマについての意識化をさせる試みとしては以下の 2 つを行った。ひとつは、受講生へのアンケートを実施し（質問項目は「公共スポーツ施設の利用経験、施設に対するイメージ」「子どもの頃の遊びはどのようなものであったのか」等、次回の講義内容に関係するもの）集計結果を次回の授業資料とした。

もうひとつが、2 回ほど、授業参加者を 5、6 名程度の小グループに分けてディスカッションを行った。ただし、教員側の運営能力のせいもあって、話し合ったことを十分授業の中で生かせなかったといえる。100 名前後の受講生のいる授業における授業形態のひとつのあり方として、今後、検討していく課題である。

社会学研究科の「ティーチング・フェロウシップ」プログラム（博士課程の大学院生に教育経験を積ませる趣旨）に協力した。具体的には、講義の 1 回分を博士課程の院生が担当するというものであった。当該の院生は、講義全体の流れをつかむため、ほとんどの授業に出席した。講義のテーマは、講義全体のテーマと関わり、かつ、院生の研究テーマとも関係するものを話し合いで決め、講義内容についても事前検討を 2、3 回行った。学生の反応は、小レポートに「授業の全体的な感想」を 1 項目入れておいたが、好意的なものがほとんどであった。

ヒューマンセクソロジー（村瀬幸浩 火 2：夏）

登録人数：283 名

振り返ってみれば 20 年近くこの講座を開講していることになる。学生にとってこの講座の内容がますます現実味を帯びたものになっていることをレポートなどから感じ取ることができる。昨年「デート DV」をとり入れたが、あらたな問題提起として有効であった。来年度で終了ときいているので一つひとつの課題について噛みしめるように話していくようこころがけたい。

スポーツと映像文化（鬼丸正明 木 3：冬） 登録人数：388 単位取得者：330

本年度も受講希望者が多かったため抽選を行った。受講希望者が 632 名。そのうち 410 名を抽選合格とし、222 名を不合格とした。抽選合格者のうち 30 名近くが登録せず、結果的に定数に近い数に落ち着いた。なお抽選に参加しないで登録してきた学生が数名いた。これは制度上の問題と思われる。抽選合格者のみ登録でき、不合格者や抽選不参加者が登録できないようにしていただきたい。ことしは抽選実施後、抽選（即ちオリエンテーション）に参加できなかった者の追加合格や合格者と不合格者の交代などを原則として一切認めなかった。来年度以降もこの方針は徹底していきたい。

抽選の効果であろうか、出席率とともにレポートの内容が質量ともに充実してきており、A 評価のレベルがここ数年かなり上がってきている。

授業最終回の総括を昨年より充実させたので、「なぜ、スポーツ映像論で映画をこれほど観たのか」「なぜジャンル映画への参照が必要なのか」改めて理解できたという声が多かった。来年度は「運動」・「スペクタクル」の概念定義や社会的役割をもっと授業の中に組み込んでいこう

と考えている。

運動と体力の科学（渡辺雅之 木2：冬） 登録人数：100 履修人数：

（４）教養ゼミ

本年度の教養ゼミの開講は3つであったが、結果的に、2つのゼミで受講希望がなく、1つのゼミになった。近年の各学部教育改革では、1年次からの少人数教育が重視されており、「教養ゼミ」との「競合」がある可能性もある。全体のカリキュラム改革とも関係するが、今後の検討課題であろう。 (坂なつこ)

教養ゼミ 坂なつこ（金2：冬） 登録人数：9名 履修人数：9名

テーマ：A. R. ホックシールド『管理される心』を読む

前半は、ホックシールドの『管理される心』を輪読し、ゼミ後半では、その時の議論を深めるかたちで学生の関心にそって個人発表をしてもらった。それらの発表をもとに学生たちにはレポートを提出してもらい、印刷物としてまとめた。各人のテーマは以下の通り。

「小学校・中学校時代の自己提示に関する考察 - 役割概念を通して」(社・2)

「感情を搾取される集金人」(経・2)

「感情労働と感情の本来性」(社・2)

「テニス・テニス部と演技の関係」(社・1)

「サービス業と感情労働の関わり方」(商・1)

「新興宗教における勧誘と信者の心理」(商・1)

「江原啓之のスピリチュアルワールド」(商・2)

「喪失と感情作業」(社・1)

「スタンフォード監獄実験 状況の囚人」(経・1)

最近の教養ゼミではなかなか議論が活発化しないという状況があり、今回は議論としてまとまらなくてもよいから、人前で発言することを目標とした。こちらの意図通りにいったというよりは、同じような関心を持った学生が集まり、テーマが自ずと絞られ、活発に議論ができたと思う。「自分の気持ち」や「感情」といった、自明に「自分に所属する」「自分の中から生じる」ものにとらえていたものが、社会関係や制度と深く関わっているということに素直に驚いている様子が分かり、また、他の講義から得られた知識や疑問と関係させて発表したり、発展させてレポートを書いたりするなど、ゼミという形態の良さが出たと思う。

教養ゼミ（上野卓郎 木3：夏） 受講なし

教養ゼミ（高津勝 木2：冬） 受講なし

(5) 学部講義・ゼミ

商学部講義・スポーツ・ビジネス論 岡本純也(金4・冬)

受講人数：304名

本年度から開講した講義であり、「スポーツ・ビジネスの構造、特徴を踏まえて、その問題点、課題を分析し、それらへの対応策などを考えられるようにする」ということを目的とした。授業担当者は主にスポーツ・ビジネスの全体について概説する回を担当し、スポーツ・ビジネスの実際については外部から講師を招いて講義をしてもらった。

期末にレポートを提出(2~3枚程度)させたが、コピー&ペーストで作られるものが多いのに閉口した。「剽窃」に対して「悪」という認識が非常に薄い。レポートの作成方法・作法について全学的に共通のテキストなどを作って配布するなどの工夫が必要であると感じた。

授業のテーマは下記の通り。

「スポーツ・ビジネスとは」

「スポーツ・ビジネスの歴史」

「放送とスポーツ~多様化するメディアとライフスタイル」

「SportsBusiness-Online.com から見るスポーツビジネスの歩き方」

「スポーツイベントへのスポンサードメリット~JAL ホノルルマラソンの例」

「アメリカ・マイナーリーグのマーケティング」

「地方におけるスポーツチームの躍進 琉球ゴールデンキングスの事例」

「球界再編のビジネス的背景」

「スタジアムをいっぱいにする IT 戦略」

「エスパルスの経営と広報の仕事」

「パープルサンガとホークスの経営」

「まとめ」

社会学部講義・スポーツ社会学の基礎 内海和雄(火3・冬)

登録人数 226名

オリエンテーション時は教室が1202(200人)であったために、約400名の参加者を半分に限定せざるを得なかった。社会学部コマ故に、社会学部(2年生以上)は全員OKとして、他学部は4年生に限定せざるを得なかった。その後、受講登録後、2202教室へ移動

	A	B	C	D	F	合計	割合(%)
2年(社)	66	29	9	1	11	116	51.3
3年(社)	14	16	5	3	11	49	21.7
4年(全)	15	23	3	1	19	61	30
合計	95	68	17	5	41	226	100
割合(%)	42	30	7.5	2.2	18	100	

することが出来た。その限定の折り、来年度共通教育の「スポーツと権利」で開講することを約束し、教務課には当初から2202教室を確保し、抽選・制限の不必要なように要請した。

講義内容は、講義要項に従ったが、パワーポイントを活用せず、もっぱら古式な語りで行った。他の多くの講義がパワーポイント使用のためか、古式な語り形式はかえって、「新鮮」「暖かみがある」等の感想も貰い、悦に入っている。

予想通り、2年生の受講が多く、また成績も2年生が優位であった。これは受講動機の上で、2年生の方が必死であるからであろう。

TAの申し込みを春に行っておくことを知らずに失敗したが、院生のS君が補助してくれた。講義の反応はまあまあだと感じている。授業評価の結果が楽しみである。

尚、成績では授業出席数をかなり厳格に遵守した。講義要項でも、オリエンテーションでも、そして講義の中でも何度か指摘したことだが、年度末に何人かの学生が泣き込んできた。しかし原則で対応した。

社会学部講義・スポーツと社会過程 高津 勝(木3・夏)

テーマ:「グローバル化と伝統」 登録人数:67 履修人数:41 (単位修得者:38)

- ・スポーツの生成・展開に関するグローバルな認識をベースにし、日本での受容・定着の過程を歴史・社会的に明らかにし、その意味について検討することにした。
- ・到達目標としては、シラバスの【授業の内容・計画】に示す事項について一通りの知識を得るとともに、自己の関心のあるスポーツ事象について歴史的な認識を深め、自分なりの見解や提言を持てるようになることをめざした。
- ・方法としては、講義だけでなく討論も積極的に組織し、各人の問題関心にしたがってレポートを作成し、報告する形式も取り入れた。すなわち、講義形式を採用するが、討論の機会も積極的に設定することにし、さらに、各人の問題関心にもとづいてスポーツ・身体競技の歴史的な事象を調査し、それを「中間レポート」(6月末)としてまとめることを求め、優秀なレポートについては授業中に執筆者が報告する機会を設けた。期末に筆記試験を実施した。
- ・TAがつくことになり、毎回の出席調査やビデオの使用など、充実させることができた。「授業と学習に関するアンケート調査」の結果では、「説明の仕方は分かりやすかったか」と「ねらいや学習目標は理解できたか」の2項目が全体平均より下であった。

社会学部講義・身体社会史(大学院共修)坂 なつこ(月4・冬)

講義テーマ:ノルベルト・エリアスの『文明化の過程』を読む

登録人数:13名 履修人数:5名

大学院との共修であるということで、少人数のゼミを行うことをオリエンテーションの際に説明したところ学部からは4名の履修者があった。オリエンテーションに参加せずに、講義と違って登録した学生も数人いた。

授業は、『文明化の過程』上・下巻を購入してもらい、輪読した。学部生にとっては高価な書籍であるとは思ったが、社会学理論に関心が高い学生が多く、卒業論文とも関わらせ読み解いていた点は印象深かった。その後は、身体の観点からM.フーコーの論文などを紹介し、議論を深めた。フーコーとの関わりから、鋭い指摘をするものも多く、知的刺激にふれられたことはこちらとしても収穫が多かった。最後はレポートを提出してもらった。4年生が多かったことと、月曜日の常で、授業日が不規則となったり、欠席者がでたりなど、多少難儀したが、全体的には活発に議論ができた。

< 学部ゼミ >

商学部ゼミ 岡本純也 (木 4・5)

受講者：10名

夏学期はテキストとして『プロスポーツクラブのマネジメント - 戦略の策定から実行まで』(武藤 泰明著)を輪読するとともに4年生の卒論の検討を行った。夏には佐賀県に調査合宿に行き、サガン鳥栖(J2のクラブ・チーム)に関する調査を行った。冬学期には4年生の卒論の検討を中心に、3年生は夏合宿の調査結果をまとめた。年度末には卒論発表会を行い、OB・OG、外部のスポーツ・ビジネスに携わる方などを招いて、卒論4題、合宿の報告1題を発表した。例年に比べこごんまりとした会になったが、4年生にとっては卒論を見直す良い機会に、3年生にとっては卒論とはどのようなものなのかを知る良い機会になった。

社会学部ゼミ 藤田和也 (月 3・4)

講義テーマ：子どもの発達と社会

登録人数：6人 履修人数：5人

3年生は募集しなかったため、4年生のみ。各自の卒論テーマにかかわるレポートを報告し、ディスカッションすることをメインにゼミを進めた。そのうち一人は鬱病の療養のため途中休学。あとの5人のうち、4人は卒論(下記テーマ)を書き上げ提出した。残る一人は、就職活動をやり直すために留年を決意した。

(卒論テーマ)

- 学級崩壊の現状とその解決策の模索
- 公立学校の学校選択制度をめぐって
- 児童虐待問題の背景
- レクリエーションは子どもの人間関係をどう変えるか
- 格差と教育 誰にも開かれた教育とは(仮題)(3月中に書き上げる予定とのこと)

社会学部ゼミ 高津勝 (木 4・5)

テーマ：「人はなぜスポーツに感動するのか～スポーツ文化の歴史・社会的究明～」

(3年)曜日：木 時限：5限 登録人数：2名 履修人数：2名

4月～5月末はスポーツ社会学に関する基本的に文献を輪読し、討論した。

6月以降は、尾崎ゼミ・坂ゼミと合同で地域調査の準備作業に入り、9月末、兵庫県加古川市、同神戸市垂水区、大阪府堺市を訪れ、スポーツ組織に関する実地調査を行い、冬学期は調査結果の分析と報告集の作成を行なった。詳細は、尾崎ゼミ・坂ゼミの報告を参照されたい。

(4年)曜日：木 時限：4限 登録人数：4名 履修人数：4名

ゼミテンの卒論作成の指導を中心に運営した。卒論テーマは、以下のとおり。

- 「FIFA ワールドカップと日本のマスメディア～2006年ドイツ大会～」
- 「日本におけるスポーツ報道とスポーツジャーナリズム」
- 「ヨーロッパのサッカーと人種差別」

「日本における卓球競技の現状と課題」

以上のうち、2名が卒論提出。他は留年。

なお、冬学期から交換留学生1名が参加し、「自由研究」に従事するようになった。テーマは、「伸び悩む日本のスポーツ～それをどう克服するか～」。

社会学部ゼミ 尾崎正峰（木4・5）

登録人数：3 履修人数：3

当初はテキストの輪読。6月頃から高津ゼミ、坂ゼミと合同での地域調査（加古川市、神戸市垂水区、堺ブレイザーズ）についての議論。9月末に調査実施。冬学期は調査報告書のまとめのための議論を行った。

社会学部ゼミ 坂なつこ（木4・5）

（3年生）講義テーマ：高津、尾崎ゼミと合同ゼミ

木5 登録人数：3名 履修人数：3名

（4年生）講義テーマ：卒業論文の個人指導

木4 登録人数：1名 履修人数：1名

社会学部ゼミ 内海和雄（月5・6） 受講生なし

社会学部ゼミ 上野卓郎（木4・5） 受講生なし

（6）大学院講義・ゼミ

大学院講義 岡本純也（木2・夏）

講義テーマ：スポーツ・マネジメント

受講人数：4人

スポーツによる「地域活性化」ということは頻繁に言われるが、その実態として経済的な側面と社会的側面が存在すると考えられる。社会的な「活性化」が図られるとしたら、それほどのように測定することが可能だろうか。ここではロバート・パットナム『孤独なボウリング - 米国コミュニティの崩壊と再生』（柏書房、2006年）を読みながら、「社会関係資本」の概念とその測定方法について検討を行った。

大学院講義 尾崎正峰（木2・冬）

講義テーマ：スポーツのグローバル化とローカル化

登録人数：1 履修人数：1

履修者が1人なのでゼミ形式とした。内容は、テキストの輪読と個別発表。

大学院講義 坂なつこ（月4・冬）（学部共修「身体社会史」参照）

大学院講義 上野卓郎（火2・冬）

大学院講義 藤田和也 サバティカルの関係で休講

大学院講義 高津勝 今年度休講

大学院講義 内海和雄 今年度休講

大学院ゼミ 岡本純也（木3）

登録人数：3人

スポーツ社会学から2名、外国人研究生1名で、いわゆる「スモール・リーグ」（四国アイランド・リーグ、北信越BCリーグ、bjリーグなど）について、その現状や発展の可能性について、関連文献などを輪読して検討した。

大学院ゼミ 藤田和也（火2）

講義テーマ：教育保健論

登録人数：2 履修人数：3

修士2年1名とOD2名が受講。各自の研究テーマで報告と討論をした。

テーマは、「戦後大学改革と大学の自治をめぐる」、「兵庫県明治期の小学校における身体文化（身体形成や養護の活動）の様相」、「大正・昭和初期の保健室の変遷」など。

大学院ゼミ 高津 勝（火3）

テーマ：「スポーツ・スペクタクルと民衆の生活・文化」

登録人数：4名 履修人数：4名（修士課程、2名。博士課程2名）

参加者および教員の研究・研究計画やM論・D論の準備過程の草稿を逐次発表し、質疑討論をした。また、スポーツ史・スポーツ社会学に関する最近の研究動向に関するサーベイも行った。

大学院ゼミ 内海和雄（火2）

参加者全員の研究を2ヶ月に1度の割合で検討。空いた週はスポーツ社会学の文献を学習した。特に、2月に入って、Barrie Houlihan教授招聘のために、氏の著作と講演資料を学習した。ゼミが中心になり、3月中旬の招聘を運営した。

大学院ゼミ 尾崎正峰（水2）

登録人数：2 履修人数：1

テキストの輪読と個別発表。

夏学期まで2人で、冬学期以降は1人がイギリス留学のため1人でのゼミとなった。

大学院ゼミ 坂なつこ（月5）

登録人数：1 履修人数：1

論文個人指導を行った。

大学院ゼミ 上野卓郎（木4・水2）

3 . 教育条件の整備・拡充

本年度の特筆すべき成果として、「教育担当副学長と運動文化科との情報連絡会」の開設があげられる。そこで、まず、この会の設立経過を振り返り、目的と性格を再確認することにした。そのあと、本年度の体育関係施設・設備整備の進捗状況について整理し、あわせて、今後の課題を列記することにする。

(1) 「教育担当副学長との連絡調整会議」の開設

2007年1月12日の坂内教育担当副学長への「運動施設整備・利用調整会議（仮称）」設置の申し入れ、ならびに、「2007年度の基本方針」（『われわれの教育活動』2007年4月3日）にもとづき、4月5日と5月10日に同副学長と懇談し、上記「調整会議」の開設について意見を交換した。

二度にわたる懇談・交渉の過程で、運動文化科は、当面の施設計画にかんする情報交換、日常的な施設整備・運用にかんする各部署間の調整、運動文化の授業に関する長期計画（たとえば、概算要求事項）の実現にかんする学内論議の推進という3つの課題を実現するために、情報の交流と合意形成の場として「調整会議」を開設する必要がある、と主張した。

それに対し、副学長から、「連絡調整会議」について、学則上の正規機関ではないが、副学長の権限の範囲内において、運動文化科と学生支援・教務・（必要があれば）施設の各課を交えた、いわゆる「連絡調整会議」を開催すること、学生支援課が窓口（事務局）となること、

開催にあたっては、1ないし2週間前に議題を添えて申し込むこと、という提案があった。概算要求事項にかかわる長期計画については、さしあたり「連絡調整会議」において意見を交換し、それをふまえてしかるべき方策を検討したい、との意見が表明された。

運動文化科はエリア会議において副学長提案に合意し、ここに、正式名称を「教育担当副学長と運動文化科との情報連絡会」（以下、「情報連絡会」）とする情報交換と協議の場が誕生することになる。

本年度中、「情報連絡会」は、6月12日と12月11日に開催され、国立キャンパス新体育館建設、ならびに国立キャンパス現体育館増改築、当面の施設・設備の整備が主要な議題になった。については、「情報連絡会」での情報の共有と学生支援課の協力もあり、これまで以上の進捗があった。については、特段の進捗はなかったが、「課外活動施設年次整備計画」（学生支援課作成）などが開示されるなど、情報・意見交換という点で大きく前進した。

(2) 体育関係施設・設備の整備

本年度の施設・設備整備は、下記に示すように、例年に比べてかなり前進した。そのなかには、「情報連絡会」の開設にともなう学生支援課との情報交流の成果とみなしうるものも多く含まれている。

体育館内部の改修（2008年2月）

- ・男子更衣室（シャワー室・廊下・玄関）改修
- ・アリーナ床補修（床の研磨及びライン引き）
- ・中庭洗濯場（水栓・排水・電源増設）
- ・男子便所、女子便所（便器交換、洗面器交換及び増設）
- ・女子シャワー室（化粧洗面台の設置）

他に、北側内壁（時計の下付近）の破損修理（2007年8月）

テニスコート（オムニ）サービスエリアの破損箇所の補修（2007年3月、6月、10月）

局部的な補修にとどまり、再度、破損した箇所がある。完全な補修とは言い難く、再修理が必要。

野球場器具庫の設置（2007年11月15日）

西器具庫が狭いため、野球場バックネット裏付近にプレハブの倉庫を設置。

砂置き場の整備（2008年3月4日）

西器具庫付近にある従来の砂置き場に柵がなく、砂が散乱したため、改修。

ゴルフ練習レンジネット交換（5セット）（2008年2月22日）

体育館天井電球の接触不良等修理（2007年11月28日）

体育館付近の樹木の剪定（2007年12月14 - 17日頃）

テニスコート等に落ち葉が散乱し、授業に支障をきたすため、剪定。

陸上フィールドへの土入れ（2008年2月12 - 15頃）

砂置き場の整備と並行して、既存の砂を陸上競技場フィールドに散布し、暫定的に凹凸を補修（坂口さんに依頼）。

バレーコートの排水溝改善

（土の入れ替えについては、要求を取り下げた。すなわち、学生支援課「当面の施設整備計画」に平成21年度バレーコート補修（土入れ替え、4百万円、運動文化科より要望）となっていたが、作業員さんの恒常的なコート整備で状態が良くなっており、かつ、体育館の増改築の可能性などを考慮して、大がかりな補修を見送ることにした。）

教材・教具の整備・充実については、昨年度と同様で大きな変化はないが、特記すべきものに教材用ビデオ（バドミントン、ソフトボール、フットサル）の整備がある。

なお、作業員の坂口さんの尽力により、テニスコート、バレーコート、ゴルフ練習場周辺の維持管理が進捗し、かつてないほどの良好な条件で授業を実施することができた。このことについては、各教員へのアンケート調査の結果からも伺える。記して感謝の意を表したい。

以上のような前進はあったが、本年度中に実現しなかったものや、再度補修を要するものもある。以下に列記しておこう。

現体育館の抜本的改修（増築と床面積の増大、空調設備等を含む）

（概算要求中）

フットサルコート（現ゴルフ練習場付近及び空手道場の南側付近）と金網のフェンス設置（平成19年度「教育研究環境整備費」要求書（要求部局：運動文化科、要求事項：フットサ

ルコートの整備ならびにフェンスの設置（ゴルフ練習場周辺を含む）：要求書巻末資料参照。
陸上フィールドの凹凸および芝の補修
テニス・クレートコート的人工芝化
テニスコートの排水溝改善と日よけの設置（オムニコート）
（2008年度学生支援課「施設整備計画」に掲載されており、当該年度に実現する予定。）
プールの新設

（3）今後の課題

教育条件、とりわけ体育施設の整備・拡充をめぐる最大のネックは、概算要求や大規模予算が必要な物件がほとんど実現していないことである。打開策として、さしあたり、つぎの2点が重要である。

1．運動文化科にかかる施設整備計画の精査

現時点での整備要求（当面の要求を含む。）として、以下の案件がある。現在全学的に審議中のカリキュラム改革等を念頭におき、授業計画と関連させて計画を具体的に検討することが求められる。

「国立地区」でのプール・体育館の建設（「国立キャンパス東地区のプール・体育館建設予定地について」評議会、2000年5月、参照。）

現体育館の増改築（概算要求中）

テニスのクレートコート的人工芝化

西キャンパス陸上フィールド、野球場内芝地の整備（整備要員の確保を含む。）

フットサルコートの整備と金網のフェンス設置（現ゴルフ練習場付近及び空手道場の南側付近。ゴルフのアプローチ練習場および多目的補助グラウンドとしても使用。）

2．「教育担当副学長との連絡調整会議」の充実

「情報連絡会」を介して教育担当副学長、学内各部署（とくに教務課、学生支援課、施設課）との情報の交流・共有化を進め、協力して施設・設備の整備拡充に取り組むとともに、とくに概算事項については、学内世論を喚起しつつ、役員会・執行部内での意志形成を促していくことが重要になる。
（高津 勝）

・教育部活動

1．実践交流会

今年度は、2回の実践交流会を行った。

第1回、6月19日、藤田報告「ゴルフの授業」。報告内容は巻末資料として掲載。

第2回は、岡本報告「スポーツ方法の半期2単位化（演習化）を目指して」。

現在、スポーツ方法の一つとして開講されている「スポーツ・フィットネス」の実践について検討を行った（巻末資料参照）。この授業では夏学期に多種目のスポーツを実践させ、冬学期に講義やグループワークを取り入れている。したがって、一つの種目を1年を通して実践し、技能・技術の向上や認識の深まりを目指す他のスポーツ方法とは「目標」

が異なっているとも考えられる。しかしながら、仲間との交流やスポーツを楽しむようにすることや、健康・体力の維持・向上を目指しているという点では共通する。今後は、授業時間外での予習や復習がどの程度必要であるのか、また、他の種目の授業もスポーツ・フィットネスのような授業形態が可能かどうかなどを検討していく中で、スポーツ方法の半期2単位化に向けた具体策を模索していく必要があるだろう。（岡本純也）

2. 教育活動日誌

- 2007/04/03 教育部会（新年度顔合わせ会打ち合わせ） 新年度顔合わせ会
- 05/02 教育部会（スポーツ方法・の履修者状況、施設問題（大学戦略推進経費）実践交流会について）
- 06/12 副学長と運動文化科との情報連絡会（第1回）
- 06/19 実践交流会（ゴルフの授業：藤田和也）
- 09/26 教育部会（来年度カリキュラム、非常勤講師について）
- 10/16 教育部会（来年度カリキュラム）
- 10/23 実践交流会（スポーツ方法 スポーツ・フィットネスの授業：岡本純也）
- 12/11 課外活動との運動施設利用調整会議
副学長と運動文化科との情報連絡会（第2回）
- 2008/01/22 教育部会（ウェブシラバス、「スポーツ方法アンケート」集計について、教員へのアンケート、総括と方針、予算関連）
- 02/27 教育部会（教育活動の総括）
- 03/03 教育活動の総括と方針会議

3. 調査活動

本年度もスポーツ方法・を受講した学生に対して運動文化独自のアンケートを行った。スポーツ方法 は学年末に、スポーツ方法 夏・冬についてもそれぞれの学期末に実施した。質問項目については、昨年と同様である。「教育成果」で詳述しているため、ここでは、それ以外の部分について報告する。

（1）スポーツ方法 に関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法 の受講生
- ・実施期間：2008年1月の授業期間内
- ・有効回答数：857名（登録者数 1071名）

回答者の学年別では、95.8%が1年生、4.1%が2年生、3年生は1名である。男女別では、男子が70.1%、女子が29.9%であった。受講生で最も多いのは、テニスの37.6%（322名）、次いでバドミントン19.1%（164名）、サッカーの11.2%（96名）となっている。開講時限では、1限が最も多く36.5%、次いで3限33.7%、2限29.8%である。

スポーツ方法 の履修希望種目で第1希望は、もっとも多いのがテニス（21.8%）、次いで

サッカー・フットサル(16.4%)、バドミントン(14.6%)、バスケットボール(11.9%)、ゴルフ(11.6%)であった。第二希望では、バドミントンが19.3%ともっとも希望が多く、次いで、サッカー・フットサル13.1%、卓球12.5%、ゴルフ10.8%、テニス10.5%が、10%以上の回答を得ている。

(2) スポーツ方法 に関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法 の受講生
- ・実施期間：夏学期、2007年7月、冬学期、2008年1月のそれぞれの授業期間内
- ・有効回答数：夏学期86名、冬学期106名(登録者数：夏学期204名、冬学期281名)

回答学生の学年別では、4年生が43.2%ともっとも多く、次いで3年生51名(26.6%)、2年生(25.5%)、1年生はわずかに8名(4.2%)であった。単位取得はできないが、大学院生1名の参加もみられた。男女別では、男子173名(90.1%)、女子19名(9.9%)と女子はほぼ1割の回答である。種目別でみると、テニスが32.3%、フライングディスク18.8%、バスケットボール17.2%、バドミントン14.6%の順に多くなっている。

スポーツ方法 は反復履修者の多さが特徴的であるが、もっとも多いのは「1~3回」で52.8%、「4~5回」は32.1%となっている。また、「6~7回」6.6%、「8回以上」8.5%とかなりの「リピーター」も見受けられる。来年度の履修希望でも、40.8%が「是非履修したい」と答えており、「時間帯が合えば」も20.9%と反復履修予備軍がみられる。

希望種目としては、第1希望が、テニス37.4%、バスケットボールとゴルフが11.5%、サッカー・フットサル9.9%であり、第2希望では、フライングディスク19.5%、バドミントン17.7%、ゴルフ15.0%、バスケットボール13.3%となっている。

自由記述でみると、「満足な点」は、ゴルフでは、「こまめに指導していただき技術が向上したこと」「実際にゴルフの打ちっぱなしに連れて行ってもらい、練習できたのはすごく良かった」「バードゴルフコンペなど楽しかった」など、初心者だけでは困難なゴルフ練習の特徴があらわれているように思われる。

また、テニスでは、「スポーツ方法 よりも多く打てた。ビデオ学習が充実していた。(ウィンプルドンの決勝が見れた)」や「ビデオで自分のプレーが客観的に観れて良かったです」などがあげられている。

多くは、ゲームの時間が多くとれること、技術的に向上した点を上げている。また、「よい仲間に恵まれた」「体を動かすよい機会であった」なども特筆されている。

他方、「不満な点」はどうであろうか。屋外種目でコメントされているのは雨天のために実技時間が減ったということである。また、出席人数が少なかったり、日によって変化があるため安定してゲーム等が行われなかったことへの不満もあげられている。体育館があついで寒いという施設への不満は例年のことであるが、「滑りやすかった」という点も指摘されている。技術的には、「レベルがバラバラすぎる」「技術的な部分をもっと教えてもらいたかった」などもあげられている。来年度への希望では、施設や備品の整備、ゴルフは通年での開講(夏学期だったため)、フットサルとサッカーを分けてほしいとの声もきかれた。

(3) 教員へのアンケート

教育成果のところでは分析しているが、担当者間の授業実践交流や情報・資料の交換の機会については、ここで付記する。

- ・各担当者の種目が特化していて、各人の授業や種目間で、交流する機会や場が少ないような気がする。私の場合、火曜日はサッカーで、ただ一人で授業をするのみ。水曜日も、運動文化教員室で授業についてそれほど談笑した記憶はない。休憩時間は、グループノートの点検や次の授業の準備で精一杯、といったところである。(高津勝)
- ・実践交流会や、授業の合間の雑談程度であった。(坂なつこ)
- ・必要は感じるが、常勤を持っている身としては時間が取れない。別に、常勤・非常勤・親しい職員等を含めたバドミントンやテニスの交流会があってもよいと思う。(青沼裕之)
- ・各先生方の授業中の学生のことや良いアドバイスを聞きたいときがあります。(白河善美)
- ・今年度もバドミントンの授業実践についての報告場所をいただきましたが、できれば同じ種目の他の先生の報告も伺えればと思います。(新村博信)
- ・あまり機会がありませんでした。(柴崎涼一)

(坂なつこ)

4. 教育部の活動・体制

本年度の体制は上野(部長)、坂、藤田、渡辺(庶務)であった。なお、室長(高津)も、教育部会に出席した。

教育部の活動については、活動日誌参照。

. 2008年度教育活動の方針

1. 2007年度の達成と課題

達成したものとして、教育担当副学長との情報連絡会の設置という形で、運動施設の整備・拡充についての関係部署との懇談の場の設置要求が実現したことが第一に挙げられる。

第二に、2008年度後任人事2名の枠を確保したこと、高津、内海のサバティカルに対応して非常勤講師の2名新採用を実現することができたこと、第三に、スポーツ方法の演習化、半期2単位化を可能とする授業のあり方を検討したこと、第四に、定年退職されるスタッフの担当種目授業の実践報告を受けて、次年度も非常勤講師による当該種目授業の継続ができたこと。

達成できなかった最大のものは、基本方針の第一に掲げた後任人事である。結局この課題は2008年度に持ち越され、同時に3人の後任人事をすすめるというかつてない事態となる。この人事が第一の課題であることは多言を要しない。次に、全学共通教育改革の中での運動文化カリキュラム改革案を形成するに至らなかったこと。全学の改革がどのようになるかと、新たな運動文化カリキュラム改革案を2008年度の前半には確定しなければならない。

2 . 2008 年度の基本方針

以下の 3 つの課題を重点に、2009 年度を見据えた方針を設定する。

後任人事と体制の整備、 カリキュラム改革案の確定、 施設要求の実現。

後任人事と体制の整備

早川後任人事、藤田後任人事、高津・内海の後任 1 名人事を確実にすすめ、2009 年 4 月には 3 人のスタッフを迎えること。

2009 年度の上野サバティカル（定年 1 年前）とカリキュラム改革に対応する非常勤講師の依頼をはかること。

カリキュラム改革案の確定

スポーツ方法 の必修の継続の意味、スポーツ方法 の演習化（2 単位化）提案可否の決断、講義の再編成（体系型から共通型へ）・担当の具体案、など。

運動文化カリキュラム改革の理念と必要性、その具体案の説明を煮詰めること。

2008 年度前半には確定する。

施設要求の実現

概算要求や大規模予算が必要な施設要求の実現のために、運動文化科に関わる施設整備計画の精査、教育担当副学長との連絡調整会議の充実をはかること。

3 . 教育活動

(1) 2008 年度のカリキュラム編成と体制

< 開講コマ：全学共通教育 >

全学共通教育科目における運動文化科目の開講コマ数は、通年コマに換算して 42 コマである（2007 年度と同じ）。

	2008 年度		2007 年度	
全学共通教育開講コマ	42	通年コマ	42	通年コマ
・方法	28	通年コマ	28	通年コマ
・方法	19	半年コマ	19	半年コマ
・健康・スポーツ科学	6	半年コマ	6	半年コマ
・教養ゼミ	3	半年コマ	3	半年コマ

< 体制 >

- ・ 専任は、早川後任未採用、藤田後任 1 年不補充のため、6 人の体制となる。
- ・ 高津、内海の一部サバティカル実施 + 定年前負担軽減は、非常勤講師を充てる。
- ・ 専任担当総コマ数は 17 コマとなる。
- ・ 専任不補充およびサバティカル等を非常勤コマで充当したため、非常勤担当コマ総数は 25 で、昨年度より 5.5 増となった。運動文化科目開講コマ数に占める非常勤担当コマの割合は 59.5% である（2007 年度 46.4%）。
- ・ 2007 年度の非常勤講師の継続とともに本年度 2 人の非常勤講師（森、菊池）を依頼した。

< 種目別 2008 年度開講コマ数 >

	スポーツ方法 = 通年		スポーツ方法 = 半年	
	2008 年度	2007 年度	2008 年度	2007 年度
テニス	7	10	6	5
バスケットボール	2	2	2	2
バドミントン	6	6	3	3
サッカー	4	3	1	2
バレーボール	2	1	-	-
ソフトボール	3	2	0	2
ジャズダンス	2	2	-	
フライングディスク	1	1	2	2
スポーツフィットネス	1	1	-	-
体操	-	-	1	1
ゴルフ	-	-	2	1
卓球	-	-	1	1
ジョギング&フィットネス	-	-	1	-
	28	28	19	19

< 2008 年度の特徴 >

- ・ スポーツ方法 では、テニスが 10 から 7 に減、サッカーが 3 から 4 に、ソフトボールが 2 から 3 に、バレーボールが 1 から 2 に増となった。
- ・ スポーツ方法 では、テニスが 5 から 6 に、ゴルフが 1 から 2 に増、サッカー・フットサルが 2 から 1 に、軟式野球 / ソフトが 2 から 0 に減、ジョギング&フィットネスを 1 新設した。
- ・ 種目定員を、スポーツ方法 のバスケットボールで 30 から 32 に、スポーツ方法 の卓球で 30 から 32 に変更した。
- ・ 新規非常勤講師の種目のため継続講師のスポーツ方法 の種目変更（青沼テニスからサッカーに）を依頼した。
- ・ 講義と教養ゼミの専任持ちコマのバランスから、高津、内海のスポーツ方法 担当を講義に振り替えたため、昨年度同様、スポーツ科学・健康科学は 6 コマ、教養ゼミは 3 コマとなる。
- ・ 月曜日が非常勤講師のみの授業日になる。

(2) カリキュラム、および教育内容・方法の充実

- ・ カリキュラムは、基本方針に基づく具体化を図る。
- ・ スポーツ方法の授業では、技術習得・習熟と集団形成・人間関係の相互関係を視野に入れて、学習集団（クラス、チーム）の成熟過程を把握することに努める。
- ・ 学生のアンケートと担当者の評価を総合して我々自身の授業評価をする。

4．教育条件の整備・拡充

教育条件、とりわけ体育施設の整備・拡充をめぐる最大のネックは、概算要求や大規模予算が必要な物件がほとんど実現していないことである。打開策として、さしあたり、次の2点が重要である。

(1) 運動文化科にかかる施設整備計画の精査

現時点での整備要求(当面の要求を含む)として、以下の案件がある。現在全学的に審議中のカリキュラム改革等を念頭に置き、授業計画と関連させて計画を具体的に検討することが求められる。

「国立地区」でのプール・体育館の建設(「国立キャンパス東地区のプール・体育館建設予定地について」評議会、2000年5月、参照)

現体育館の増改築(概算要求中)

フットサルコート of 整備と金網のフェンス設置(現ゴルフ練習場付近および空手道場の南側付近。ゴルフのアプローチ練習場および多目的補助グラウンドとしても使用)

テニスのクレーコート of 人工芝化

西キャンパス陸上フィールド、野球場内芝地の整備(整備要員の確保を含む)

(2) 「教育担当副学長との連絡調整会議」の充実

「情報連絡会」を介して教育担当副学長、学内各部署(とくに教務課、学生支援課、施設課)との情報の交流・共有化を進め、協力して施設・設備の整備拡充に取り組むとともに、とくに概算要求については、学内世論を喚起しつつ、役員会・執行部内での意思形成を促していくことが重要になる。

5．運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整

例年どおり、次年度カリキュラム編成期に、副学長主催で関係クラブ・サークルとの調整を行う。

6．カリキュラム開発・教育方法改善のための調査、研究

例年の調査活動に加えて、それぞれの授業担当者の「学習のためのアンケート」の結果を検討し、運動文化科全体のカリキュラムおよび教育法改善のための資料とする。

7．教育部の活動

(1) 行事の開催

教育部会の定期的開催

実践交流会の開催

施設整備関係部署との交流

新年度顔合わせ会

教育活動の年度末総括

(2) 調査活動

- 「スポーツ方法」の満足度と「スポーツ方法」の受講希望調査(冬学期末)
- 「スポーツ方法」の満足度調査(夏・冬学期末)

(3) 資料・調査報告書・研究成果等の発行

- 「われわれの教育活動」の刊行
- 施設整備・改善のための基礎資料の作成

(4) 2008 年度 教育部関係日程(案)

- | | | |
|----|-------|----------------|
| 4月 | 3日(木) | 新年度顔合わせ会(入学式) |
| 月 | 日() | 実践交流会1 |
| 月 | 日() | 実践交流会2 |
| 月 | 日() | 教育活動の総括・方針検討会議 |
| 月 | 日() | 年度末懇親会 |

われわれの教育活動

2007年度総括と2008年度方針

29

2008年4月3日発行

編集・発行 一橋大学スポーツ科学研究室 042-580-8270

運動文化教員室 042-580-8131

〒186-8601 国立市中2-1